

氏 名	やまだ ゆきよ 山 田 由希代
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 甲 第 3 7 2 号
学位授与の日付	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規程第 3 条第 3 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	工芸科学研究科 機能科学専攻
学 位 論 文 題 目	明治期の京都における「美術」の再考一名所案内記・織物工芸・絵画批評の視点から一 (主査)
審 査 委 員	教授 太田喬夫 教授 並木誠士 教授 大谷芳夫 教授 中川 理

論文内容の要旨

本論文は、京都における明治期の「美術」の意味、及び実際の「美術」界の再考をめざし、その独自な特色と意義を再評価することを目的としている。従来の近代日本美術史では、西欧近代の純粋美術に主な価値を見いだす「個性表現としての美術」を基準に明治期の日本美術の歴史が語られてきたと言ってよい。このような美術史では、京都の明治期の「美術」は、東京中心の、また中央の制度史中心の純粋美術の展開の一派として評価されることが多く、京都の豊かな独得の「美術」の世界の解明は、不十分なままであった。

これに対し、本論文は、地場産業と深い関わりを持ち、歴史的伝統に根ざした京都の社会と文化を見据え、そのなかでの「美術」の役割を再考しようとした。

本論文は、序論および第一部 近代美術史のなかの京都、第二部 明治期の京都の「美術」の再考、そして結論からなる。

「序論」では問題提起がなされ、研究の目的、独自な視点、そして主な先行研究について述べられている。このなかで政府中心の制度史としての日本近代美術史と地政学的に東京中心の美術史が批判され、1990 年前後に台頭してきた日本美術史研究の新しい方法が注目される。第一部の 2 つの章において、こうした方法を用いた北沢、木下、佐藤らの新しい研究が紹介、検討される。

第二部は、第 3 章、「名所案内記における伝統の役割」、第 4 章、「二代川島甚兵衛の綴織」、第 5 章、「絵画批評における京都と東京」の 3 章からなる。この 3 つの視点から明治期京都の「美術」が再検討される。第 3 章では、今日の観光案内図、旅行書に当たる当時の「名所案内図」に注目し、明治 28 年頃から末にかけて、そこに記されている「美術」が何を意味するのか問う。京都の歴史的伝統である寺社の「寺宝」が「美術」として扱われるようになった点が強調される。

第 4 章では、現在も続く川島織物の二代甚兵衛が明治後期、綴織制作の際、画家との共同作業で優れた企画力を発揮した実状があきらかにされる。友禅では、日本画、とりわけ風景画がもつ奥行きのある情趣あふれる個性的表現が重んじられたのに対し、川島の綴織では、その特性から、絢爛たる色彩による緻密な、平面的な表現が重視された。そこで川島の企画力が強い力を持っていたことが明らかにされた。ここから京都の織物の地場産業が、高島屋の友禅とは異なり、日本画家に対し優位の立場にあったことが明らかにされた。

第5章では、京都の美術団体である後素協会主催の「全国絵画共進会」と「文展」における絵画批評の言説を分析し、そこから当時の京都の「美術」概念の特色を東京の絵画との対比で明らかにしようとした。東京の画家が、内容と思想を重んじるのに対し、京都の画家は、形式、描き方を重んじ、また、技術こそ、美術の本質だと考えていることが明らかにされた。

「結論」では、これまでの論文の展開の要旨と成果、および今後の課題・問題点が要約された。

論文審査の結果の要旨

従来の日本の近代美術史研究は、主に、西欧近代の純粹美術や美学理論に価値目標を置いて行われてきたといえる。また、中央政府の制度史に即した美術の展開や地政学的に東京中心の美術の展開が主流であったとも言える。こうした立場からは、京都の明治期の「美術」の独自な特色と意義を十分に捉えることは難しい。これに対し、本論文は、新資料の発掘を行い、文献の精密な分析を通して、また、作品の実際の調査を通して、従来ほとんど解明されてこなかった視点や領域から、京都の明治期の独自な「美術」の意味、およびその実態を明らかにした点、評価できる。

第一に「名所案内記」にはじめて、明治28年頃「美術」という言葉が登場し、それが京都の歴史的な伝統ある寺社の「什宝」を意味したことを明らかにした点、当時の庶民にとって「美術」という意味の理解および京都の観光イメージの形成に大きな役割を「名所案内記」が果たしたことが明らかになった。第二に「二代川島甚兵衛」の企画力により、日本画家に意匠図案の指導をも行うことで、優れた綴織を製作したことを、高島屋と友禅の場合との比較で明らかにした点、評価できる。第三に明治期の絵画批評の言説を綿密に分析し、そこから、東京の絵画が内容と思想を重視したのに対し、京都では、技法・形式が重視されたということが指摘された。これも注目に値する。

以上、「名所案内記」という独自なメディア、織物工芸、絵画批評の言説という3つの視点からの明治期の京都の「美術」の見直しは、純粹美術とも政府の制度史とも違う、京都の独自性（歴史的伝統を担う寺社、地場産業の優位、精巧な表現技法の重視）を際立たせたことは、日本の近代美術史研究に新たな一面を切り開く可能性を示すものとして期待できる。

本論文の内容は、学会誌の査読論文3編として公表されている。

- ① 山田由希代「京都イメージの形成—近代からの新たな展開—」

意匠学会誌『デザイン理論』第40号29—42頁（2001）

- ② 山田由希代「近代京都における絵画と織物工芸との関係

—二代川島甚兵衛の企画力をめぐって—」

美学会誌『美学』第219号28—41頁（2004）

- ③ 山田由希代「明治後期の京都画壇に関する一考察—後素協会と文部省主催美術展覧会をめぐって—」

意匠学会誌『デザイン理論』第45号53—64頁（2004）